鳥衾（鳥ぶすま）

鬼瓦に鳥がとまらないように、また糞をかけないようにするため、止まる場所としてつけられた。

鳥衾には火事よけとして水に関係した「舟の帆」や「水の波」をつけているものがある。

寄棟造卯建

北

起り（むくり）屋根

カネ天小路

現在はガレージとなっているが、かつてはこの場所にカネ天の屋号をもつ天野家が醤油の製造卸を盛大に営んでいたことから名がついたといわれる。

妻入屋根

年代による建て方の特徴

江戸時代の家	明治時代の家
・虫籠窓をもつ中二階 ・吊り上げ式のしとみ戸 ・寄棟型うだつ	・格子造りで二階の軒が高い

藍商「紅屋」 明治中期

飴屋ー藍商ー繭問屋 弘化5年 1848年

味噌・醤油製造卸「新丹波屋」 明治5年 1872年

サテライトオフィス・カフェ 森邸

※ 輪違紋様

カネ天小路

味噌・醤油卸米屋「カネ天」

表具屋 明治13年 1880年

繭商 明治初期

起り屋根

壁土が多く入れてあるため

妻入屋根

西

（一社）美馬観光ビューロー マスコットキャラクター うだつまるです。

住宅の屋根に取り付けられる防火壁のうだつを図案化しています。明るい表情と大きな手足で活発なイメージを表現しています。

Smoking Area

TEL（自働電話） 案内所 トイレ

東

通り抜けok ※船板壁

※二階の屋根と、うだつの間にはすき間があり、うだつは防火の役目としてよりは、飾りを施したうだつとなっています。

※二階の大屋根との間にすき間がなく本来の防火を目的とした重厚なうだつです。

船頭小屋

瀬戸物屋 明治後半

繭問屋「丸十」

観光ガイドのお申し込みはこちらへ

美馬市伝統工芸体験館 TEL.0883-53-8599 （一社）美馬観光ビューロー

虫籠窓

※ 昭和初期洋風建築

サテライトオフィス・カフェ 西條邸

妻入屋根

バッタリショウギ

平田家

藍染め・みやげ物 うだつや

明治時代の家

江戸時代の家

大正時代 明治時代 江戸時代

呉服屋 明治前半

繭商

傘屋「山木」 大正9年頃 1920年

旅館「木五」 明治

安政2年 1855年

もとは旅篭

醤油屋 1850年頃

家具屋「木治屋」

自働電話（美馬市伝統工芸体験館前公衆電話）

日本の公衆電話ボックスで２番目に古い形のものを再現しています。標記が「（自働）電話」となっているのは決して間違いではなく、理由は定かではありませんが、当初から「自動」ではなく「自働」の文字が使用されていたと伝えられています。

南町の町家の立地

美馬市伝統工芸体験館

この地に脇町税務署が明治32年に建築され、その後、昭和27年に税務署が移転し、昭和63年まで法務局、そして美馬市伝統工芸体験館「美来工房」として現在に至っています。構造は鉄筋コンクリート造りですが、外観は税務署時代の擬洋風デザインで町並みに違和感無く溶け込んでいます。美馬市の伝統工芸である美馬和傘や竹人形などの竹工品の展示をしています。また、この美来工房に（一社）美馬観光ビューロー・脇町うだつの町並みボランティアガイド連絡会があり、美馬市の観光情報や、町並み案内の予約受付も行っていますので、お気軽にお立ち寄り下さい。

南

美馬市伝統文化体験館「美来工房」では美馬和傘の製作現場を無料で見学ができます。

和傘技術を活かしたミニ和傘か和傘ランプシェード製作体験も可能。

（和傘ランプシェード）

平田家 第12世将棋名人小野五平翁の生家

天保２年10月６日木屋五平(宿屋)で生まれ成長した。泊り客のさす将棋を見たのが病みつきとなり、三度の飯よりも将棋が好きになった。持って生まれた素質とその熱心さのため、7、8歳の頃すでに五平を負かす者はなかった。19歳の時江戸に出て将棋名人天野宗歩に弟子入りした。明治33年ついに第12世将棋名人となった。９段終身名人は将棋界の最高峰であり、脇町が生んだ偉大な人物である。大正10年1月、91歳の高齢で没した。

吉野川を往来していた帆掛け船の船板を使った壁です。当時ここまで吉野川の水が来ていたそうで、水に浸かっていた板を使用していた為、腐らず残っています。

出格子の持ち送り

格子窓

※ 細かな格子は居住空間
大まかな格子は店空間

松屋小路

松屋小路

かつて松屋という呉服商があり、大きく商売をしていたのでその屋号からこの名がついたといわれる。桜小路、カネ天小路とともに中町筋へ抜ける路地として、その昔料理屋が立ち並び夜遅くまで三味線の音色が町並みに流れていたといわれる。

袖壁卯建

鬼　瓦

桜小路

桜小路

かつて桜屋という古くから酒屋を営む大店があり、その後、当時ではめずらしい百貨店として営業し、たいそうにぎわったことからこの名がついたといわれる。

重層卯建
袖壁風卯建

松屋小路

反物屋「讃岐屋」
明治40年
1907年

※森家は、昭和初期の医院としてのたたずまいを残す建物です。
●心臓外科 森博愛医師
http://www.udatsu.vs1.jp/

味噌・醤油卸「泊屋」
明治19年
1886年
大正時代
※ 切妻づくり

呉服屋ー足袋製造「松屋」「佐直」前店
大正13年
1924年
※ 大正末期の伝統的町屋形式

瀬戸物屋
幕末～明治

酒造ー百貨店「桜屋」

出格子の持ち送り
※ モッチョクリ

袖卯建

切妻造り

桜小路

飾りとしての役目だけのうだつ。
※ 妻入屋根

町屋
西風に煽られて火が飛んでくるのを防ぐために西側だけに造られた。

油問屋
大正4.5年
1915年～1916年
お城のような豪華な家

二重卯建　片卯建

妻入屋根
開口鬼瓦

「切り妻うだつ型」で後付けのうだつです。
※お店の中には、古い刻み煙草用のタンスがある。

脇町中学校のモデルとなりました。

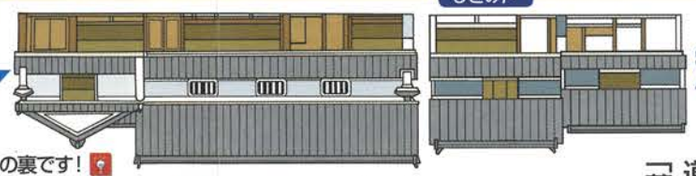
古いから卯建がない。後の相次ぐ火災によりうだつをつけるようになったと考えられます。したがって、この建物は当時の火災から焼けずに残ったものと考えます。

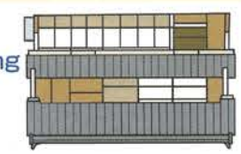
この「うだつの町並み」区域内での路上喫煙は禁止されています。
マークの在る場所でのみ喫煙が可能です。

道の駅 喫茶「藍蔵」へ

吉田家住宅 ※ 有料です
※ かつての藍商の家で、母屋の後には大きな蔵が続きます。

卯建の鬼瓦は
魔除け
火除け
雷除け





片卯建

国見家
※卯建は寛政10年
お茶・釣り道具　刻み煙草
「丸王」「国見」
宝永4年の建築
1707年

正木家
藍蔵
「赤谷屋」
文政12年
1829年

田村家
藍商ー繭問屋
「赤谷屋」「大谷屋」
宝永8年
1711年

産 直
田 丸

鬼瓦はこの裏です！

吉田家の裏の鬼瓦は舌を出しています。

舌を出した鬼瓦！

仮本陣
（お成りの間）

※お成り玄関
・部屋数 25室
・家　族 20人・使用人 50人

江戸末期　天保6年 と 慶応元年 に増築
1835年　1865年

藍商「佐直」　吉田家　寛政4年（1792年創業）

脇町一の豪商「佐直」：佐川屋直兵衛屋敷

道の駅「藍ランドうだつ」へ

「船着き場公園」道の駅「藍ランドうだつ」へ

呉服屋ー繭問屋
明治中期

金貸し「賀美」

繭問屋
高吉金兵衛

国見家

主屋の建設は宝永４年である。敷地は表通りから吉野川に達する広いもので、川岸に門があり石段を通じて吉野川に出ることができた。規模は田村家とよく似ているが、屋根架構は、登り梁折置組み中引梁で合掌に組み、その上に直接棟木を置いている。指物を用いず、丸太梁に鴨居と敷居を入れ丸太に近い柱があり古風である。

正木家がモデルとなった脇町中学校

田村家

宝永８年４月の棟札をもち、町並みで２番目に古い建物とされている。敷地は表通りから吉野川川岸まで占めていたと言われ、藍商を営む赤谷屋のものであった。
田村家は明治初期に入居し現在に至っている。主屋の規模は桁行８間に梁間４間、表に１間、裏に身舎（もや）の屋根をそのまま葺き下した１家半の下屋が付く。

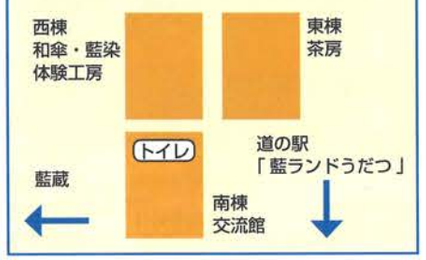
かつては石段から直接裏を流れていた吉野川へ降りられました。

吉田家住宅

うだつの町並み通りのほぼ中央に位置する“吉田家住宅”は、主屋・質蔵・中蔵・藍蔵・離れ家の５棟が、中庭を囲むように建ち並び、藍商の典型的な配置形式を残しています。

開館時間：9時～16時30分
休 館 日：12月27日～1月1日
入 場 料：大人510円/小人250円
問い合せ先：吉田家住宅
TEL.0883-53-0960

うだつの町並み 観光交流センター



しとみ戸

しとみ戸
部戸

格子組みの裏に板を張り、日光をさえぎり、風雨を防ぐ戸で、昼は部梁（しとみばり）の内に設けた戸決（とじゃくり）に納めておき、夜はおろして戸締まりとする。

開口鬼瓦

虫籠窓

窓の形が虫を入れる籠に似ているところから「虫籠窓」と書いて「むしこ窓」と呼ばれています。木を使った窓や練り土に漆喰を塗り堅牢に造り盗難除け、また部屋の明かり採り、風通しをよくするため造られたが、時代とともに装飾的な面も兼ねるようになりました。

塗込虫籠窓・葺おろし型袖卯建

出格子の持ち送り

卯建の競争「大一」と「大万」

●「うだつ」とは…？

うだつは元来京都・奈良地方の中世末に町屋の板屋根に現れたもので、板屋根の端の保護を目的としていた。大のこぎりの使えない時代では破風板とせき板との製造が困難であり、粘土質の土が多く用いられたため、当時の防火にそで壁として大いに役立った。

北

※ 野崎の前座敷

瀬戸物屋

風呂屋 大正中期

前座敷 明治44年 1911年

書状集箱

呉服商「武田氏」 寛政12年 1800年

倉庫 うだつの実物模型

呉服屋「大一」 安政6年 1859年

荒物屋「大万」 明治19年 1886年

生田前屋敷 前身建物 明治17年建 1884年

※開口型鬼瓦東「あ」

「日本の道百選」記念碑
「手づくり郷土大賞」記念碑

共同井戸

※脇町の井戸は深いので殆どが滑車のついた「つるべ」式です。

文化10年5月(1823年)に作られました。

※ 袖壁卯建・塗込虫籠窓

書状集箱（郵便ポスト）

このポストは明治4年4月20日新式郵便制度が創始されていた時に使用されていたものと同じ形のものです。ちなみに明治41年から現在の赤いポストになったそうです。

トイレ

TEL

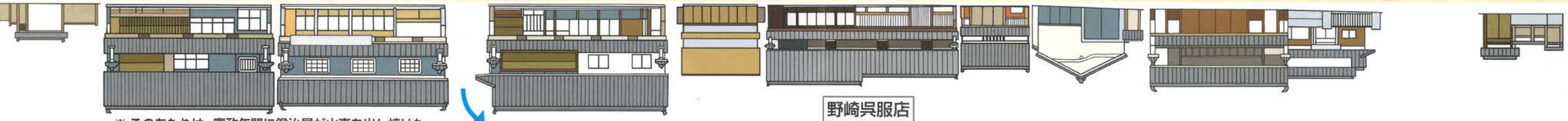
南町筋では最も質が良く残っている。

カフェや書店等の複合施設

うだつ上がる

※昭和55年建

うだつまるが「わきまち」の「うだつ」について紹介します。



※ このあたりは、寛政年間に鍛冶屋が火事を出し焼けた。明治に入ってから新しく店を構えたものが多い。

裏は茶の子町まで通じます。

魚屋「紺屋」

絹糸商「ヤマキチ」 明治35年 1902年

薬種商「うちだ屋」 明治末期

呉服屋「大和屋」 明治時代

※ 一番古い呉服屋

呉服屋「のざき」 江戸時代末期

大工部屋「さのぎ」

「大万」前屋敷

生田屋敷

南

明治時代に入ると、次第に卯建が華美になってきました。

茶の子町…かつては脇町に商いに来た商人が昼食や休憩をとる場所で、食堂が建ち並び繁昌していたといわれる。

脇町と吉野川について

うだつの町並の南側に広がっているのが吉野川です。「四国三郎」と呼ばれ、四国で最高峰の石鎚山系を源にし、徳島県を横切って紀伊水道に注ぐ長さ約194kmの大河です。脇町は、その吉野川の中流域に位置し、人口は約1万6千人。江戸時代から明治時代にかけて、阿波藍の集散地として吉野川の水運を利用して発展した町です。明治22年の市町村制度施行時には1市2町、137村であって、徳島市・撫養(鳴門市)につぐ3番目の町でした。

蜂須賀氏は、阿波入国以後「藍」を奨励した。脇町の富商の多くは藍に傾倒し阿北の中心地となった。藍商のことを俗に「藍師」と言い北陸・九州・讃岐等へ行商した。現在の南町が旧商家の本街道として最も繁華な通りであった。この付近の家屋は大半がその当時のまま残っており、土蔵造りで隣家との境界には「うだつ」という土造りの防火壁がある。

この「うだつ」とは、時の稲田氏が防火対策として奨励したものであるが、これを造るには相当な建築費を要したので、この防火壁の造れないことを「うだつがあがらない」と言ったものでこの言葉が今も一部で使われている。

この防火壁は2階の壁面から1m位突出しており、木舞竹も縄も全く腐しょくしておらず昔のままである。

現在残っている「うだつ」は約50個であるが格子・虫籠窓と共に南町の景観を形成している。南町のうだつのある町並みは、昭和63年12月16日に、全国で28ヶ所目の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

わきまち

うだつのあがるまち

うだつ「卯建」は、二階の壁面から突き出した漆喰い塗りの袖壁で、火よけ壁とも呼ばれ防火の役目をしていました。
江戸時代、裕福な商家はこの「うだつ」をあげた立派な家を競って造りました。ことわざ辞典にいつまでもぐずぐずして一向に出世できないことを「うだつがあがらぬ」と記しており、この語源になったのではないかと思われます。即ち、このような立派なうだつのある家を建てる甲斐性がないことから「うだつが上がらない」と言われるようになったと考えられます。もう一つの説は、うだつ（梲）は二階の大屋根にいつも頭を押さえつけられているところから「うだつが上がらない」という言葉ができたとも言われています。

（一社）美馬観光ビューロー
マスコットキャラクター
うだつまる

うだつの町並み
美来創生のまち美馬市
2020.4

観光交流センター

脇町うだつの町並みは、阿波藍で栄えたまち。美馬市観光交流センター「藍染工房」では、その歴史に触れ、体験できる天然藍の染料を使ったハンカチ染めなどができます。日本三大暴れ川「四国三郎吉野川」には、防水林として豊富に竹が植栽されていたことから、美馬市では和傘や竹人形、竹笛など、貴重な伝統工芸が数多くあります。その和傘の技術を活かしたミニ和傘、和傘ランプシェード製作体験ができる「和傘工房」。地鶏生産量の日本一を誇る「阿波尾鶏」や地元食材を活かしたランチを「茶房」で楽しむことができます。「観光交流室」では阿波藍に関する展示を行っており、うだつの町並みをよりいっそう楽しむことができますので、お気軽にお立ち寄りください。

観光交流センター

西棟/藍染体験工房

西棟/和傘体験工房

脇町劇場（オデオン座　※山田洋次監督、西田敏行主演「虹をつかむ男」の舞台となる）

脇町劇場

脇町劇場は1934（昭和９）年に芝居小屋として建てられ、歌舞伎や浪曲などが催され、戦後は映画館になり、地域の憩いの場として親しまれました。間口が14.4m、奥行27mの二階建てで、花道、うずら座敷、太夫座等の設備が整っていました。舞台には直径約６mの回り舞台があり四国では愛媛県の内子座、香川県の琴平金丸座に現存しています。その後映画の斜陽化と建物の老朽化により平成７年に閉館し、取り壊される予定でしたが、松竹映画「虹をつかむ男」（山田洋次監督）の舞台になり、一躍脚光を浴び、文化的価値が見直され、指定文化財として平成11年５月に、昭和初期の創建時の姿に修復されました。

（一社）美馬観光ビューロー
マスコットキャラクター
うだつまる

●（一社）美馬観光ビューロー
〒779-3610 徳島県美馬市脇町大字脇町92　美馬市伝統工芸体験館内/TEL.0883-53-8599　http://www.mimakankou.com